■さぎのん荘の即堕ち－体験

誅魔忍の狭霧は、今日も人知れず妖怪退治に出かけていた！
今回の相手は夜中の路地裏に出現し、女性ばかりを襲うという色魔の類。
大した相手ではないが、数が多いということで呑子――酒呑童子の美女も付き添うこととなった。

「最近えっちな妖魔が増えたわねぇ……妖魔も溜まってるのかしら♪」
「笑いごとじゃありませんよ。……っ！　早速か……！」
「噂通り、随分なせっかちさんみたいねぇ♪」

件の場に足を踏み入れた途端、露骨に姿を現した人型――男の妖魔たち。
妖魔とは思えぬ図々しさを持つ彼らは、一人が目前に出て注意を引き、もう一人が背後から襲いかかってくる。
夜中に死角から不意打ちされれば、常人であれば何もできずに毒牙にかかってしまうだろう。
今回もそうだと高をくくっていたのか、それとも狭霧たちの美貌に気を取られたか、
妖魔は狭霧の苦無にも呑子の妖気にも気付かず――

――……
――――……

「何よぉ、凶暴なクセに楽勝ねぇ♪」
「油断は禁物です。……と言いたいですが、確かに骨が無いですね」

背後から襲ってきた妖魔は瞬殺し、続いて囮役も滅却。
その後も似たり寄ったりの妖魔が次々と狭霧・呑子の身体を狙ってくるが、
全てを返り討ちにしていた。
常人にとっては脅威でも、この二人であれば並の妖魔は敵ではない。
数をこなすにつれ、面倒さや物足りなさすら感じるほどだ。
油断、慢心は最大の敵――とはいえ、弱いものは弱い。

「これなら一人でも大丈夫そうねぇ」
「そうですね。二手に分かれ、早く済ませましょう」

この程度であれば多少の数が来たところで、一人でも対処に問題ない。
狭霧は色情妖魔を早々に全滅させるため、呑子と分かれることにする。

――……
――――……

◆狭霧１
（しかし、次から次へと……）

一人になったとはいえ、今までの戦闘で力量差は思い知れるだろうに、
それでも淫魔は懲りずに襲ってくる。
辟易しつつ、狭霧は隠し持っていた苦無を握り……

（後ろを取ったつもりだろうが……遅い！）

――……
――――……

ぱんっぱんっぱんっぱんっ♥
「ふぐっ♥♥　お♥♥　っっぐ♥♥　っおおおっ♥♥」

（莫迦な♥♥　この私が♥♥　こうも容易くっっ♥♥）

相手は格下の妖魔。またも一撃で始末できるはずだったが……
数分後、狭霧は身体を持ち上げられ、背面駅弁の体位で犯され、
あまつさえ尋常ならざる快楽を覚えていた。
淫魔たちは結界を張り、淫気と呼ばれる能力で狭霧を強制的に発情させ、
身体と精神を鈍らせて事に及んだのだ。

（まさかこんな下級妖魔が、これほど強力な淫気を――ぉっ♥♥　ダメだ♥♥　流されてはぁぁっ♥♥）

忍として最低限は学んでいるとはいえ、狭霧にとって淫技は最も不得手とするもの。
勝利どころか、快感に流されないように堪えるだけで精いっぱいであり、
その“堪え”も気を抜けば今にも決壊しそうなほどだ。

「くっ♥♥　いい加減にっ♥♥　離……」
ぱんぱんぱんぱんっ♥　ごづぅんっ♥♥
「あぁぐぅっ♥♥　それ以上は許さ♥♥　あッッ♥♥」

小柄な妖魔のどこにこんな力があるのか、
持ち上げられた身体が更に揺さぶられ、最奥が抉られると威力相応の快感に眼が裏返り――

（何だこれは♥♥　何かが♥♥　せり上がってくる♥♥　まさか……あ、有り得ん♥♥　有り得――）
ドプゥッ♥♥　ドプ♥♥　ドビュルルルルルルルッ♥♥
「お♥♥♥　おっ♥♥♥　おぉおぉおぉおぉおぉ――――ッッ♥♥♥」

妖魔が力強く震えた直後、身体が更に浮き上がるかと錯覚するほどの奔流で快感が一線を超える。
肉悦の頂に昇り詰めた狭霧は、獣のような声で啼き叫ぶのだった……

（ま……♥♥♥　負けた……♥♥♥　誅魔忍が♥♥♥　雨野流が……こんな下劣な技に……♥♥♥）

◆呑子１
（ほぉら、一人になったわよぉ♪　隙だらけのお姉さんに釣られちゃいなさぁい♪）

セーターの裾を少し引き上げ、敢えてパンツが見えるようにして淫魔を誘う呑子。
目立つ大振りな胸乳に加え尻肉もふりふり左右させると、あっという間に妖が寄ってくる。
しかも今まで使わなかった能力……淫気まで使い、本格的に性的陵辱に及ぶつもりだ。

（いっちょ前に淫気なんか使っちゃってぇ♪　でもぉ……）

だが、むしろ呑子は嗜虐的な笑みを浮かべる。
外見からのイメージ同様に性的な意味で奔放、経験豊富な呑子にとって、
下位の淫気などは逆に好みとするところだ。
淫気を使われたとなれば、反撃として性欲旺盛な淫魔を味わう言い訳も立つ。
舌舐めずりしたいほどの疼きを抑え……色魔が一線を超えた行動に出るのを、
呑子は敢えてギリギリまで愉しむ。

（三流淫魔ちゃんの淫気なんかが、この酒呑童子に効くわけないじゃなぁい♪
久々に愉しませてもらうわよぉ～♪）

――……
――――……

ぱんっ♥♥　ずぱんっ♥♥　じゅっぽ♥♥　どちゅんっ♥♥

「はへっ♥♥　はァへッ♥♥　おほ♥♥　っほぉぉん♥♥」

余裕ぶっこいて先手を譲った数分後、
そこには押し倒されて体重をかけたピストンを叩き落とされる呑子の姿があった。

（まさか♥♥　こんなに強い淫気、持ってるなんて♥♥　完全に舐めてたわ♥♥　このままじゃ……）
ずぱぁんっ♥♥
「をほぉっ♥♥　種付けプレスっ♥♥　そんな強くしたら♥♥　ダメ♥♥　おまんこダメんなる♥♥
あ♥♥　やだ♥♥　負けちゃダメ♥♥　三流淫魔ちゃんなんかにぃぃぃ♥♥♥」
ドプンッ♥♥　ドプッ♥♥　ブビュルルルルルルッ♥♥
「負けるっっ♥♥♥　おっおっおぉほぉおぉおぉおぉおぉおぉっ♥♥♥
種漬けっ♥♥♥　種漬けぇえぇえぇえぇえぇ♥♥♥　鬼まんこ負けて種漬けイグぅぉおっ♥♥♥」

◆狭霧２
淫魔にまさかの敗北を喫してしまった狭霧。
格下の妖魔すら退治できないとなれば誅魔忍の恥。
汚名をそそぐべく、狭霧は再び妖怪たちの元に。
油断さえしなければ負けることはない――気を引き締めたつもりの狭霧だが、
その肉体にどれだけの淫魔が目を付けているかなどは考えおらず……

（二度も不覚は取らんっ！）

――……
――――……

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ♥
「おっ♥♥　おぐっ♥♥　やめ♥♥　抜けぇぇ♥♥
あ♥♥　また♥♥　やめろ♥♥♥　奥……ッッッ♥♥♥」
（ま……♥♥　またしても……あ、ダメだまたあの感覚がっっぁっっ♥♥♥）

汚名返上のためにと、プライドが邪魔して一人で立ち向かったのが不味かった。
淫魔は前回よりも多く激しく群がって狭霧を襲い、その分だけ夥しい淫気に晒される。
それでも誅魔忍らしく欲を抑えて戦っていたものの、最後の一体を前にして一瞬腰が震えて動きが鈍り、
蹴りを躱され……脚を持ち上げられたまま後ろから犯された。
所謂『後ろ矢筈』の体位で奥を突かれ、前に刻み込まれた感覚が甦る。

「あっ♥♥　こ、この……離せぇっ♥♥　んあっ♥♥　また大きくっ♥♥
出すなっ♥♥　やめろっ中は♥♥　中だけは――――♥♥」
ドブブブッ♥♥　ゴプ♥♥　ビュビュゥゥゥゥゥゥゥゥッ♥♥
「んぁあああああああっ♥♥♥　中♥♥♥　また中にぃっ♥♥♥
よくも……ぉ♥♥♥　おぐぅぅ゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛っ♥♥♥」

屈辱すぎる格下への連敗。耐え難いほどの悔しさを覚えるのとは裏腹に、
身体は芯から肉愉悦を記憶するのだった。

◆呑子２
鬼でありながら……何より淫技に自信があったにも関わらず淫魔に負けてしまった呑子。
快楽が大きかっただけに悔恨も相応で、楽天的な呑子も珍しくやる気を見せていた。
この憂さはただ退治するだけでは治まらない。
今度は逆に自分から犯し、たっぷりと虐め抜いてやろう。
嗜虐的に微笑む呑子は、敢えて隙だらけの乳尻を見せびらかし……

（オトナの鬼の怖さ、思い知らせちゃうんだから！）

――……
――――……

じゅぼぼぼっ♥　じゅぶぶぶぶぶぅっ♥♥
「おっ♥♥　お？！♥♥　おぅ゛ぅんっ♥♥　下から、なのにっ♥♥　凄すぎよぉっ♥♥」

思惑通り、淫魔を押し倒していた呑子。
上を取った騎乗位で、最初こそ責めていた……つもりだったが、
下からとは思えぬ激しい突きに下半身が降伏。
気付けば自分から腰を振り……無自覚に精を受け入れてしまう。

じゅぼじゅぼじゅぼじゅぼじゅぼ♥♥　じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼぉっ♥♥
「どうして♥♥　こんな格下おちんちんなんかに♥♥　いやぁんっもっと優しくしてっ♥♥
騎乗位で負けたくないのぉ♥♥　あっへ♥♥　おっおっおっお゛……っっ♥♥♥」
ドビュゥゥゥゥゥッ♥♥　ドブ♥♥　ゴプゥゥゥゥゥゥゥッ♥♥
「おほぉ～～～～～～～～♥♥♥　負けるっ♥♥♥　また負けるぅっ♥♥♥
騎乗位マウントとってるのにぃっ♥♥♥
格下おちんちんにアへっちゃうぅぅ゛ぅ゛ぅ゛ぅ゛っ♥♥♥」

□ｖｓ即堕とし痴漢編

◆二人揃って痴漢に即堕ち
電車で買い物に出かけていた狭霧と呑子。
だが霊力の高い美女二人が電車内にいて何も起こらぬはずもなく、
早速淫魔に後ろを取られていた！

（……！　これは痴漢？　しかも妖怪……？）

妖怪は隠密系の能力でも持っていたのか、触れられてようやく気配に気付く狭霧。
以前、野外で淫魔に無惨な敗北を喫した狭霧にとって、この手の妖怪は特に強い嫌悪の対象。
即刻祓おうとするが、吊革を掴んだ状態で体勢が固定されて抵抗を封じられてしまう。

（もうこの手の妖怪はうんざりだ……！　今すぐ……何、身体が、動かんっ？！
くそ、格下妖怪如きが封印術だと？　……情けないが、呑子さんに頼るしか……）
「……っ♥」
（な……呑子さんまで……！）

隣の呑子も同様に動きを封じられており、淫気による強制的な快感を耐えているところであった。
呑子が敵わないのであれば、もう狭霧にはどうすることもできない。
せめてもの抵抗にと呑子に倣って声を抑えるが、
痴漢の行為は揉む撫で触るを経てもなおエスカレートし……

（生暖かいものが当たって……ま、まさかっ？！）
ずぶ……っ♥
「んんんっ♥♥」
「ぁ……くふぅぅ……っ♥♥」

霊能力の実力者が二人揃って犯される。
ただでさえ屈辱的だが、ともすれば快感にすら耐えられなくなりそうだ。

それだけは絶対に認めるわけにはいかない。
強力な封印術など、そう長くは続かないはず。
解けた瞬間に反撃できるよう、狭霧と呑子は目を閉じ歯を食い縛って耐え……

ぱん♥　ぱん♥　ぱん♥　ぱん♥
(我々がこんな痴漢如きにっ♥♥)
(二人揃って負けるなんて、そんなの――♥♥)
ドビュ♥♥　ドプ♥♥　ドブドブドブドブ……ッッ♥♥
「おッ♥♥♥　お♥♥♥　おッ♥♥♥　おぉおぉぉぉ……ッッッ♥♥♥」
「えひっ♥♥♥　んむっ♥♥♥　ん♥♥♥　んんむんぉをぉおぉおぉぉぉ……♥♥♥」

しかし、やはり耐えられなかった。
四方八方に何も知らぬ人々がいる中、
二人は必死で痙攣と喘ぎを抑えた。
封印の影響もあり、おかげで誰にも痴漢種漬け絶頂被害が知られることはなかったものの、
結局妖怪たちにはヤリ逃げされてしまうのだった……

◆痴漢リベンジ
逃がした痴漢は大きかっ……問題はそこではない。
あんな色魔、放置しておけば大変な被害が出てしまう。
狭霧と呑子は痴漢妖魔を討伐するため、昨日と同じ車両に向かっていた。

(いつまでもやられたままではいられん……！)
(そろそろ、オトナの怖さを思い知らせてあげないとねぇ♪)

――……
――――……

ぱんっ♥　ぱんっ♥　ぱんっ♥　ぱんっ♥
「んっ♥♥　んぐっ♥♥　ふ♥♥　お゛……っ♥♥♥」
「あっ♥♥　やめ♥♥　そこ……ぉお゛っ♥♥♥」
(こ……こんなはずでは……♥♥　なぜだ♥♥　なぜこのような卑猥な行為にぃぃっ♥♥♥)
(こんなのウソよぉ♥♥　ただの痴漢ちゃんにここまで感じるなんて♥♥　有り得ないのに……また……♥♥♥)